



平成29年度
(2017 年度)

業 務 年 報

Annual Report for the year 2017

(平成 30 年 11 月)

地方独立行政法人 青森県産業技術センター野菜研究所

Local Independent Administrative Institution

Aomori Prefectural Industrial Technology Research Center

Institute of Vegetable Research

平成 29 年度 業務年報 目次

	頁
I 試験研究	1
1 試験研究概要	1
2 主要な野菜・畑作物の生育状況	6
3 気象表・図	8
II 試験研究成果・普及情報の公表及び研修・技術協力	11
1 試験研究成果・普及情報	11
(1) 普及技術情報	11
(2) 刊行物	12
(3) 学会・研究会	12
(4) 試験研究成果発表会	13
(5) 公開デー	13
(6) 一般雑誌・普及誌・新聞・テレビ・ラジオ	14
(7) 表彰	14
2 研修・技術協力	15
(1) 農業ドクター	15
(2) 講師派遣	15
(3) 審査員派遣	17
(4) 会議・研究会	18
(5) 視察受け入れ	21
(6) 研修受け入れ	21
III 職員研修	21
1 国内研修	21
2 県・産技研修	22
IV 種苗の生産と配布	24
1 作物の原原種の採種	24
2 種苗等の配布	24
V 資格取得	24
VI 総務	25
1 位置・土地・建物	25
2 所掌事務・分掌事務	25
3 組織・職員	25
4 事務分担	26
5 予算	31
VII 圃場利用図	33

1 試験研究概要

(1) 栽培部

ア 青森ブランド野菜の高品質安定生産技術の開発

(ア) ナガイモの高品質安定生産技術の開発

a ナガイモ品質低下要因の解明 (平いも)

本年は平いもの発生量が少なかったため、茎葉重やいも重と平いも発生との関連性は判然としなかった。

b 種いもの大きさに応じた栽培体系 (1 年子種子)

(a) 収量性の評価

40gの1年子を用いて、ガンクを切除し5月下旬に植付けすると、慣行に比べていも長、いも径が小さく、全重は軽くなった。総収量は慣行区が3,785kg/10a、小種子区が2,716kg/10a (慣行比72) であった。

(b) 芽付き種子の栽培体系

① 植え付け時期の検討

5月上旬植え栽培では、40gの芽付き1年子は60gの芽付き1年子と同等の収量が得られた。また、5月中下旬植え栽培では、60g芽付き種子の5月上旬植え栽培に比べ8～9%減収し、AB品率は同等であった。

② 子いも種子の離乳状況

頂芽付き40gの種いもを5月中旬に植付けた場合の離乳時期は、植付け後52日前後であり、その時期のつる長は約150cmで新しいも長は5～7cmと推測された。

(イ) ニンニクの新作型開発と高品質安定生産技術の開発

a 珠芽を利用した新作型開発試験

(a) 場内試験

珠芽から効率的に種子りん片を得るには、秋期にパスライトと穴あき農ポリでトンネル被覆をし、りん片分化期10日前に追肥することが有効であった。

(b) 現地試験

トンネル被覆処理は生育および収量の向上に効果があった。低温処理は球重の増加には効果があったが、裂球発生率が増加し、萌芽率はやや低下した。

b 越冬前低温年における植付け時期の影響

植付けが7日遅れることにより、りん片分化期は5日、収穫期は13日遅れたが、A品率の低下は慣行区より

緩慢で、収穫期の総収量は慣行区比96%となった。

(ウ) 夏秋どりイチゴの高品質安定生産技術

a 四季成り性品種「すずあかね」春定植作型における収穫繁忙期の作業分散技術

花房制限区、遅植え区ともに7月下旬の収穫ピークを抑え、収穫量が落ち込む8月下旬～9月上旬に増収できることを明らかにした。収量および株管理作業の面から遅植え区が繁忙期の作業分散に有効であると考えられた。

b 農繁期の省力化を狙った採苗方法の開発

株当たり総収量430～738g、可販果収量272～499gとなり、1.5～2.5葉期到達が遅い子株ほど収量が増加する傾向が認められた。栽培初期の出蕾花房および採苗年に発生する一次根が初期生育に影響している可能性が考えられた。

イ 青森ナガイモの飛躍を目指した生育予測技術と長大系ナガイモ「園試系23号」を活用した輸出規格対応生産技術の開発

(ア) 近接リモートセンシングによる生育計測・収量予測技術

植被率カメラによりナガイモ茎葉の生育状況を計測することが可能で、計測値からナガイモの収量を予測することの可能性が示されたが、種いもの種別、処理等によっては、推計法をさらに検討する必要がある。

ウ 青森にんにく革新技術実用化

(ア) ニンニクの流通過程での品質に及ぼす栽培条件等の影響

a 場内試験

(a) 品種が貯蔵品質に及ぼす影響 (貯蔵品質)

-3℃貯蔵では収穫が遅くなるとくぼみ症の発生率は増加し、特に7月4日収穫では大幅に増加した。黒石Aと白玉王では品種間差はみられなかった。

(b) 種子重、マルチ、収穫時期が貯蔵品質に及ぼす影響 (貯蔵品質)

-3℃貯蔵ではりん片くぼみ症は収穫が遅くなるに従い発生は増加するが、マルチの違いにより差が見られ、収穫時期の気温等の影響も考えられた。

b 現地試験

(a) 収穫時期が貯蔵品質に及ぼす影響

収穫期が遅く、生葉数が少なくなるに従っていくぼみ症の発生が多くなる傾向があるが、ほ場によって差がみられた。

(i) 氷点下貯蔵後の品質に及ぼす栽培条件等の影響

a 場内試験（生育及び収量）

収穫期は、白玉王は黒石Aより14日程度早く、緑マルチは透明マルチ並みで、黒マルチは透明マルチより9日遅かった。収穫期の総収量は黒石A透明マルチが最も高く、次いで黒石A黒マルチ、黒石A緑マルチで、白玉王が最も低かった。

b 現地試験（生育および収量）

収穫期は五戸区でりん片分化期後57日後、常盤①区では52日後、常盤②区では54日後、ゆうき青森区では61日後、つがる区では58日後とばらつきがみられた。りん片分化期から収穫期までの積算気温は、五戸区で774℃・日、常盤①区で792℃・日、常盤②区で813℃・日、ゆうき青森区で854℃・日、つがる区で773℃・日であった。

エ 新たな土壌管理による高品質農産物生産技術に関する研究

(ア) ニンニク大玉栽培

a 土壌高pH管理及び養分付加とニンニクの生育 (a) 黒ボク土への適応性

土壌pHは転炉石灰区でpH8.3、苦土石灰区でpH7.8、対照区でpH7.5まで上昇した。転炉石灰区は苦土石灰区、対照区と収量は同等で、A品収量はやや低かった。

オ 農作物の生育状況等に関する調査

(ア) ナガイモ・ニンニク

a ナガイモ

いも径は平年をやや上回ったが、いも長が平年を下回ったために、いも重は平年を下回った。7月下旬～8月中旬の低温・寡日照がいも長に影響したと考えられた。総収量は3,680kg/10a（平年比87）、下物収量が少なくA品収量2,292kg/10a（平年比163）であった。

b ニンニク

(a) 気象及び生育経過

越冬前の生育が平年を下回ったのは、10月～11月の低温が影響したと考えられる。りん片分化期が平年より早かったのは、4月1～2半月の気温が平年より高かったことが影響したものと考えられる。りん片分

化期以降、地上部の生育が平年を上回って推移したのは、4月～5月の気温が平年より高かったことが影響したものと考えられる。

(b) 収量・品質

ニンニクのりん片分化期後60日以降もりん球の肥大が進み、総収量は平年を上回り（171kg/a、平年比116%）、裂球、奇形球の発生は多かったが、総収量も多かったため上物収量は平年を上回った。

(i) 小麦・大豆

a 小麦

穂数は平年比93%と少なく、千粒重は105%と重く、一穂粒数は97%でやや少なく、子実重は59.6kg/a（平年比97）とやや少収であった。穂数が少なかった要因は、越冬前の茎数が少なかったためと考えられた。

b 大豆

成熟期は平年より5日遅かった。稔実莢数が少なく、莢内粒数が多く、百粒重が重く、子実重は22.3kg/aで、平年比79となった。

カ あおもりながいも産地改革推進事業

(ア) ナガイモの生産性向上へ向けた高品質多収技術

a 植付け前の種苗管理技術

(a) 種いもの掘取り時期の検討

萌芽揃期は秋掘り区が春掘り区より3日早かったが、収量・品質に差はみられず、種いもの掘取り時期による影響は少ないと考えられた。

(b) 頂芽切除方法の検討

種いものガンク切除時期が早いほど萌芽が早く、多収になる傾向があった。また、頂芽の切除位置は浅い方が早く萌芽し、多収となった。

b 芽付き種子の植付け時期

(a) 植付け時期の検討

60gの芽付き1年子の5月上旬植付けに対し、5月中旬植えは総収量が97%、5月下旬植えは91%となった。AB品率は5月下旬植付けで高かった。

(b) 冷蔵庫出庫時期の検討

種いものを冷蔵庫から出庫する時期の違いによる生育や収量への影響は、植付け7日前と植付け1日前で差が見られなかった。

キ 水田農業の革新技術緊急普及

(ア) ニンニク収穫後の間断乾燥による燃料消費節減技術

a 現地試験

現地試験では連続乾燥とテンパリング乾燥を組み合わせた乾燥方法を検討したが、いずれもテンパリング乾燥よりくぼみ症の発生率は増加した。

b 場内試験

乾燥初期の連続乾燥期間が短いほど乾燥日数は増加したが、灯油消費量は減少した。くぼみ症発生率は乾燥初期に0～14日連続乾燥を組み合わせることで、常時連続乾燥より大幅に減少した。

ク 労働力不足に対応した機械化農業推進事業

(ア) 自動直進トラクターの現地実証（ゴボウ）

自動直進区では作業時間が対照区よりトレンチャー耕では8%減少、収穫では21%増加となった。総収量は対照区よりやや少収となった。

ケ 深度センサー付きカメラを用いた植物の生育計測

画像から距離情報を数値化することは可能であったが、精度を高めるため方法を検討する必要が認められた。また、栽培圃場においての使用は十分可能であると考えられた。

（２）品種開発部

ア 特産野菜優良品種の育成

(ア) ナガイモ優良品種の開発

a 育種素材の養成

放射線照射したナガイモ17系統を供試し、7系統を有望、1系統を再検討と判定した。

b 遺伝資源の収集・保存

ナガイモを含むヤマイモ42系統を継代栽培し、遺伝資源として保存した。

「つくなが1号」と「園試系6」の交配の一部系統について特性を把握した。

(イ) ニンニク優良品種の開発

a 育種素材の養成

ガラス室内で稔性系統12系統、放射線照射9系統を養成した。露地栽培では稔性系統の球径はS以下であったが、放射線照射系統の球径はM～Sであった。

b 系統選抜による品種育成

「福地ホワイト」（黒石A系統）の中から選抜した有望系統を栽培試験に供試した結果、総収量と大玉球の収量が増加したものの、同時にB・C品率の増加も認められたことから、個体間差の拡大がうかがわれ、再選抜が必要と考えられた。

c 遺伝資源の収集・保存

ニンニクの遺伝資源として、保存している28系統を維持した。

(ウ) イチゴ優良品種の開発

a 供試系統の形質調査・選抜（四季成り）

四季成り6系統について収量・品質等を比較した結果、TK10（11sA-e 7e）及びTK15（11sC-f1e）を有望とし、他の系統を打ち切りとした。

b 供試系統の形質調査・選抜（一季成り）

一季成り1系統について収量・品質等を比較した結果、TK24（13sA-け4）を再検討とした。

c 新配布系統の採苗

来年度の試験用の四季成り系統TK25・26・27と一季成り系統TK28を確保した。なお、一季成り系統は、試験する予定の農林総研に配布した。

イ 特産野菜原種維持増殖事業

本県の特産野菜原種として、ナガイモは直径7.5mm以上のむかご、ニンニクはS規格以上のりん球を生産し、次年度の種子分などを除き、それぞれ300kg、360kgを、JA全農あおもりに供給した。

ウ 青森ナガイモの飛躍を目指した生育予測技術と長大系ナガイモ「園試系23号」を活用した輸出規格対応生産技術の開発

(ア) 長大系ナガイモ「園試系23号」を活用した輸出規格対応生産技術

a 所内試験

(a) 品種登録に係わる調査

「園試系23号」は、むかごの数、むかごの大きさ、葉身の長さ、葉身の周縁のくびれの強弱により「園試系6」との区別性が認められた。また、いも長が長く、いも重が重く、肥大性に優れていた。

(b) 最適栽植様式の検討

「園試系23号」の3L以上の大型規格を増加させるためには、株間を24cm以上とすること、施肥は5月下旬植付では総施肥窒素量15kg/10a、6月上旬植付では25kg/10aとすること、種いも重は100gとすることが有効と考えられた。平いもの発生要因は判然としなかった。

b 現地試験

「園試系23号」を供試した現地試験では、所内試験に比べ、いも重がやや軽く、3L以上の大型規格の収量も少ない傾向があった。また、試験地によっては、平いもが多発したことから、「園試系23号」には平いもが多発する条件があると考えられた。

エ あおもりながいも産地改革推進事業

(ア) 優良種苗の安定生産技術

a 補光によるむかご増収効果

(a) 反射シートによる補光（簡易網室）

通路に反射シートを張ることにより、むかごの総

収量及び大型規格収量が対照に比べ、約50%増収した。

(b) 蛍光灯による補光（パイプハウス）

蛍光灯の照射及び遮光することにより、むかご総収量及び大型むかご収量は少なくなったが、日射量が多い場合、光合生産物の貯蔵量は増加した。

b 催芽によるむかご増収効果（網室）

催芽によりむかごの増収効果がみられた。この場合、生育促進により大きいむかごの割合が増加することが増収につながるものと考えられた。

c マルチによるむかご増収効果（網室）

マルチの有無によるむかご収量は、2つの網室では増収の傾向が異なり、一定の傾向は見られず、判然としなかった。

オ 畑作物原種の生産・供給

主要農作物の原種子を増殖した。そばの生産数量は、予定数量を大きく下回った。

カ 畑作物優良品種の選定

(ア) 畑作物等原種の維持・増殖

a 畑作物等（なたね、そば）の原種の維持及び増殖

畑作物の原種の保管を行った。

b 小豆及びエダマメ用大豆等の原種等の維持

エダマメの原種及び小豆、粟の保存系統の保管を行った。

キ 水田の高度利用を目的としたカスケード利用可能なナタネ品種の育成

東北農業研究センターで育成中のなたね交雑系統について、地域適応性を検討するため6系統を供試し、「厨系326」を有望と判定した。

(3) 病虫害部

ア 気象変動や生物多様性に適応した特産野菜の安全・安心な病虫害管理技術の研究開発

(ア) 特産野菜に発生する病虫害の高感度診断技術の開発と気象変動に適応した発生生態の解明

a 病虫害の発生生態と防除技術

(a) ダイコンのキスジノミハムシの発生生態と防除

① ダイコンのキスジノミハムシの発生消長調査

黄色粘着トラップにおけるキスジノミハムシ成虫の誘殺は、5月第6半旬からみられ、7月第6半旬に急増し、発生盛期は8月第1半旬であった。7～8月の誘殺数は前年並であった。

② は種時にフォース粒剤を施用した場合の茎葉散布の散布間隔の検討

ダイコンのキスジノミハムシに対し、は種時の粒剤処理に加え、茎葉散布はは種10日後までに開始し、

7日間隔散で行う体系が最も防除効果が高いと考えられた。

(b) ニンニクのチューリップサビダニの発生生態と防除

① チューリップサビダニのほ場における発生推移

チューリップサビダニは、4月は葉身の先端部内側や葉脈沿いに寄生し、以降、ニンニクの生育に伴い葉身だけでなく葉鞘基部、葉鞘内部へと移動し、葉鞘内部をりん球に向け降下していくことが示唆された。

② チューリップサビダニの貯蔵中の発生推移

個別包装区で確認されたサビダニは収穫時にりん球に寄生していたサビダニに由来しており、サビダニの寄生球率は、個別包装区より混合包装区の方が高く、9月中旬には寄生りん球から健全りん球へ拡散していると考えられた。

③ チューリップサビダニに対する高温処理の防除効果

ニンニクリン片に寄生するチューリップサビダニは、50℃6時間の高温処理により死滅できる可能性があると考えられた。

(c) ゴボウ黒条病の発生

今回発生したゴボウの黒条症状は *Itersonilia perplexans* による「ゴボウ黒条病」であることが明らかとなった。

(イ) 土壌微生物相診断に基づいたニンニク土壌病害虫の総合防除技術の開発

a イモグサレセンチュウ多発ほ場における輪作体系の検討

輪作区では、植付前より収穫後の線虫密度が減少していた。輪作区ではイモグサレセンチュウによる線虫害は見られなかった。

b ガス難透過性フィルムによる土壌くん蒸剤の畦内処理の検討

クロールピクリン・ハイバリアー被覆の黒腐菌核病及びイモグサレセンチュウに対する効果は、農ポリ被覆とほぼ同等であった。

c イモグサレセンチュウの発生消長

無消毒区では、地点によってイモグサレセンチュウの土壌線虫密度に大きく差があることが明らかになった。また、表層下20～30cmの方が0～20cmよりも線虫密度が高い傾向が見られた。

消毒区では、イモグサレセンチュウは低密度で推移していた。クロピク処理によって土壌線虫密度を低下させることができるが、表層下20～30cmではイ

モグサレセンチュウが生存していることが明らかとなった。

イ 青森にんにく革新技術実用化事業

(ア) 新たな土壌病害虫対策技術

a イモグサレセンチュウ発生ほ場産にんにくの収穫期判定の可能性

イモグサレセンチュウ発生ほ場でイモグサレセンチュウの被害を受けない収穫時期は、無処理区では5月22日、クロピク区では6月23日、現地では7月1日であった。被害を受けない収穫時期の判定は、内側から3、4枚目の葉鞘へ侵入が確認されたときが境界と考えられた。また、被害が少ない場合および土壌線虫密度が低い場合では、根のイモグサレセンチュウでその有無を確認できると考えられた。

ウ 農業低減技術確事業

(ア) 生物くん蒸を利用した土壌病害虫防除技術の開発

チャガラシの生育量は3月24日播種で最も確保されたが、目標とされる4t/10aには及ばなかった。根腐病の発生が少なく、土壌消毒の効果は判然としなかった。

(イ) 土壌消毒薬剤及びガス難透過性資材の防除効果の検討

ハイバリアは農ポリと比較して被覆期間の後半までガスを保持していた。また、クロールピクリンとソイリーンの消毒区間での根腐病の発生や収量に差は認められなかった。

エ 農業安全・国内検疫推進事業

(ア) ニンニクのチューリップサビダニに対するモベントフロアブルの防除効果及び倍量薬害試験

モベントフロアブルの4000倍液2回散布は、収穫後のニンニクのチューリップサビダニの寄生を抑制する効果が高く実用性がある。

オ あおもりながいも産地改革推進事業

(ア) マルチローター（ドローン）を活用した薬剤散布の検討

a ナガイモの主要病害虫に対する防除効果

マルチローターによるナガイモ病害虫に対する薬剤散布の防除効果は、慣行のブームスプレーヤーによる散布と同程度であると考えられた。

カ 病害虫防除農業開発

(ア) 主要病害に対する新農薬の防除効果

・ヤマノイモの青かび病に対するベルコートフロアブル200倍1分間種いも浸漬、ホームイ水和剤200倍10分間種いも浸漬は対照と同等、ICボルドー66D10倍2秒間種いも浸漬は効果が低い。

・ヤマノイモの葉渋病に対するオンリーワンフロアブル1000倍は対照と同等の効果であった。ファンタ

ジスタ顆粒水和剤3000倍、NF-180フロアブル1000倍は効果が低かった。

・ヤマノイモの根腐病に対するフロンサイドSCの500ml/200L/10a全面散布土壌混和处理の効果は対照より低い。モンガリット粒剤の18kg/10a植付前作条土壌混和处理は対照より効果が低い。ファーマーシングエースの100kg/10a全面処理土壌混和の効果は認められなかった。

・ニンニクの黒腐菌核病（種子消毒）に対するアフェットフロアブルの種球重量0.5%湿粉衣の効果は対照より高い。

・ニンニクの黒腐菌核病（土壌処理）に対するモンガリット粒剤の18kg/10a全面土壌混和の効果は対照よりやや低い。

(イ) 主要病害に対する新農薬の防除効果

・ヤマノイモのアブラムシ類（粒剤）に対するダントツ粒剤9kg/10a植付時作状処理土壌混和は対照より効果が高い。

・ヤマノイモのアブラムシ類（茎葉散布）に対するトランスフォームフロアブルの2000倍液散布は対照より効果が高く、ベネビアODの4000倍液散布はジャガイモヒゲナガアブラムシに効果が低い。

・ダイコンのキスジノミハムシ（は種時播溝土壌混和）に対するアベイル粒剤6kg/10aのは種時播溝土壌混和は効果がやや低い。

・ダイコンのキスジノミハムシ（生育期株元散布）に対するフォース粒剤6kg/10aの生育期株元散布は対照より効果が高い。

・ダイコンのキスジノミハムシ（茎葉散布）に対するスピノエース顆粒水和剤の2500倍液及び5000倍液散布は対照より効果がやや低い。

・ゴボウのヒョウタンゾウムシ類に対するアクセルフロアブルの1000倍液散布及びアタブロン乳剤の2000倍液散布は対照より効果が高い。

・ニンニクのイモグサレセンチュウに対するビーラム粒剤20kg/10a植付前全面土壌混和は対照より効果が低い。

・ニンニクのネギコガに対するアディオン乳剤の2000倍液散布の対照より効果が高く、ダントツ水溶剤の2000倍液散布は効果が同等。

・露地キュウリのアザミウマ類に対するスワルスキープラスの200パック/10a、7日間隔・3回放飼の効果はやや低い。

(イ) 青森県植物防疫協会農業展示圃試験

ダイコンのアブラムシ類、ハモグリバエ類、カブラハバチに対するベネビアOD2000倍液散布の防除効果は、発生がないか少なかったため判定不能であった。

2 主要野菜・畑作物の生育状況

(1) 野菜

ア ナガイモ

5月25日植付けの露地普通栽培とし、供試系統は園試系6（2年子）とした。

萌芽揃期は6月29日（平年並）、植付けから萌芽揃までの日数は35日（平年より1日多い）であった。栽培期間を通して、地上部の生育が平年並から平年を上回った。

9月17日の台風により、落葉やつる切れがみ

られたが、9月の生育量は、地上部、地下部とも平年並みから平年を上回って推移した。

総収量は、3,680kg/10a（平年比87%）、上物収量は2,292kg/10a（同163%）、こぶが多かったものの、平いも、曲がり、リングが少なく、下物収量は平年より少なかった（平年比：49%）。

表1 ナガイモの収量調査

種イモ	年次	総収量	上物収量(kg/10a)				下物収量(kg/10a)					
		(kg/10a)	4L-3L	2L-L	M以下	計	平	曲がり	コブ・しわ	尻コブ・リング	その他	計
2年子	本年	3,680	1,039	1,110	143	2,292	453	112	564	174	84	1,388
	平年	4,234	984	366	54	1,405	1,677	223	512	238	178	2,829
	平年比	87	106	303	264	163	27	50	110	73	47	49

注) 平年: 前10か年の平均値

上物収量: JA全農あおもりやさしい出荷規格(H26まで)の「丸A」に相当する収量

イ ニンニク

平成28年9月30日植付けの露地普通栽培とし、供試系統は福地ホワイト（黒石A）を供試した。

消雪が平年より4日遅くなったが、4月上旬の気温が高く推移し、りん片分化期が4月17日で平年より5日早まった。高温の影響で収穫期が6月28日と平年（7月4日）より6日早かった。7

月2日の平均乾燥球重は105.0gで平年を上回り（平年比131%）、総収量は1,710kg/10a（同116%）、上物収量が1,406kg/10a（同118%）であった。下物収量は304kg/a（同107%）で、奇形（同118%）と、裂球が多かった（同152%）。

表2 ニンニクの収量調査

年次	収穫期 (月/日)	総収量 (kg/10a)	上物収量(kg/10a)					下物収量(kg/10a)				暦日(7月2日) 乾燥球重 (g)
			2L	L	M	S	計	奇形	裂球	その他	計	
本年	6/28	1,710	517	889	0	0	1,406	109	195	0	304	105.0
平年	7/4	1,477	155	840	194	4	1,194	92	128	64	284	80.4
平年比	-6日	116	334	106	0	0	118	118	152	0	107	131

注) 平年: 収量は平成22～28年の平均値。暦日の乾燥球重は平成23～28年の平均値

上物: JA全農あおもりやさしい出荷規格のA品、下物: B、C品

(2) 畑作物

ア 小麦

平成28年9月21日に播種し、品種はネバリゴシを供試した。

出芽期は平年より2日早く、出芽も良好であった。越冬前は気温が低かったことから、草丈、茎数が平年を下回った。越冬後は、平年並みから高温傾向であったことから、幼穂形成期は平年より1日早い3月28日となった。その後の気温

は、高めに推移し、出穂期が平年より4日早まった。穂数が平年より少なかったが、倒伏した。成熟期は平年より3日早い7月7日となった。

収量構成要素は、穂数650本/m²(平年比93%)、千粒重36.2g(同106%)、一穂粒数26.5粒(同97%)、子実重59.6kg/a(同97%)となった。

表3 小麦の生育調査及び収量調査

年次	出芽期	出芽 良否	幼穂形成 期	止葉抽出 期	出穂期	開花期	成熟期	倒伏 程度	出穂期～ 成熟期所 要日数	稈長	穂長	穂数	一穂粒数	子実重
	月日		月日	月日	月日	月日	月日		日	cm	cm	本/m ²	粒/穂	kg/a
本年	9月26日	良	3月28日	5月7日	5月18日	5月26日	7月7日	1.8	50	93	7.7	650	26.5	59.6
平年	9月28日	良	3月29日	5月12日	5月22日	5月31日	7月10日	2.9	49	94	8.1	700	27.4	61.6
平年差・比	-2日		-1日	-5日	-4日	-5日	-3日	-1.1	+1日	99	95	93	97	97

注) 平年:平成19～27年(8か年)の平均値(平成24年産は出芽不良によりデータから除外)

倒伏程度は、0:無、1:微、2:少、3:中、4:多、5:甚 の6段階

イ 大豆

5月16日に播種し、品種はおおすずを供試した。

8月上中旬にかなりの低温少照で推移し、特に8月第2から4半旬は日照がほとんど無かった。そのため、主茎長、分枝数が平年を下回り、落莢した。開花期は平年より6日遅い7月21日となった。

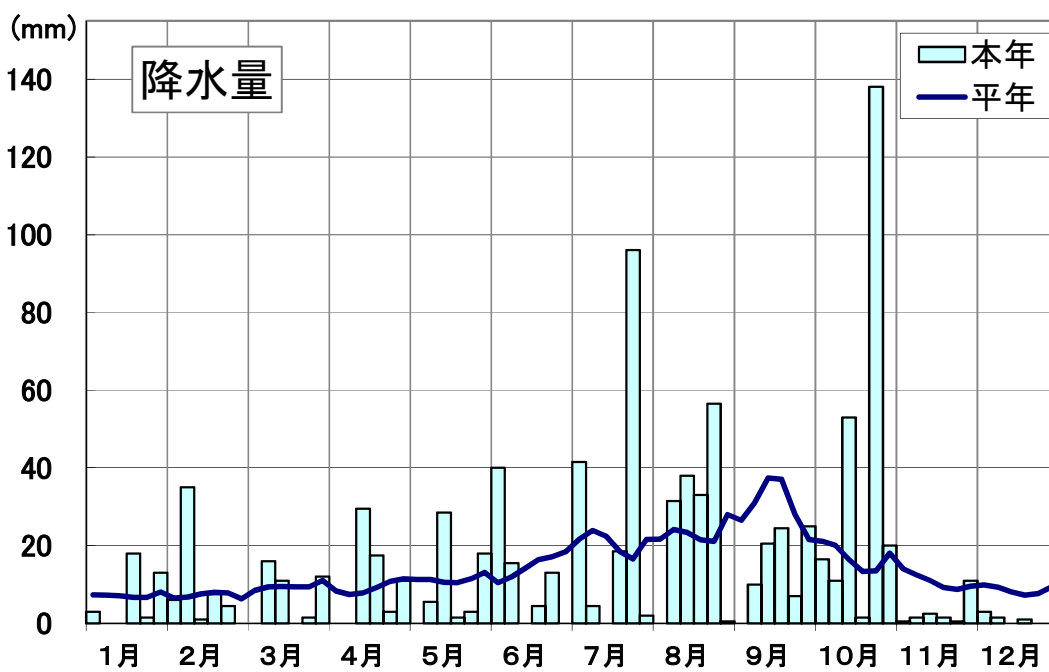
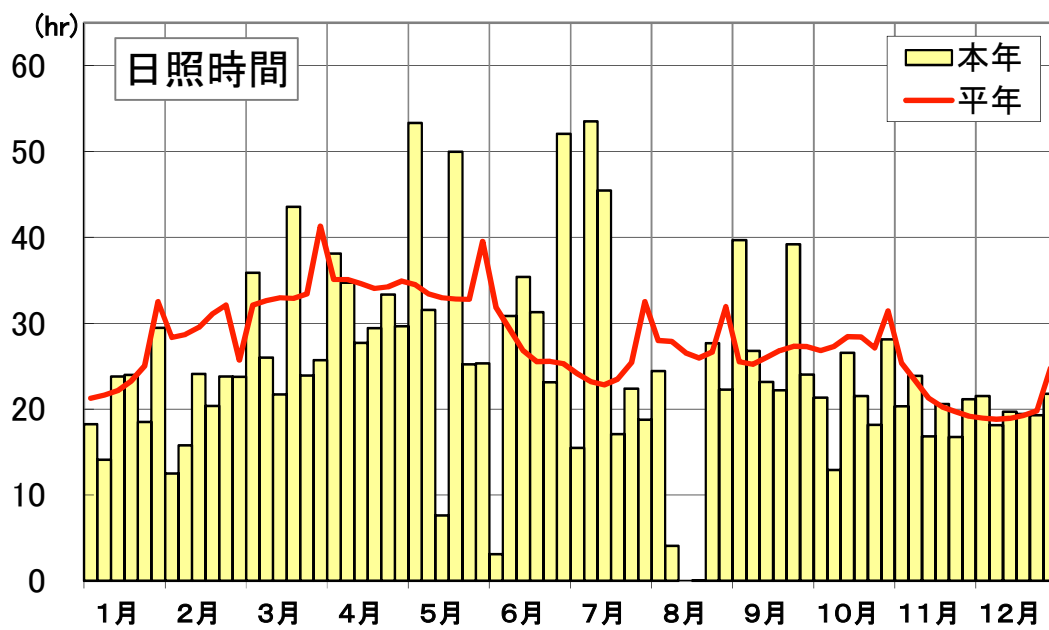
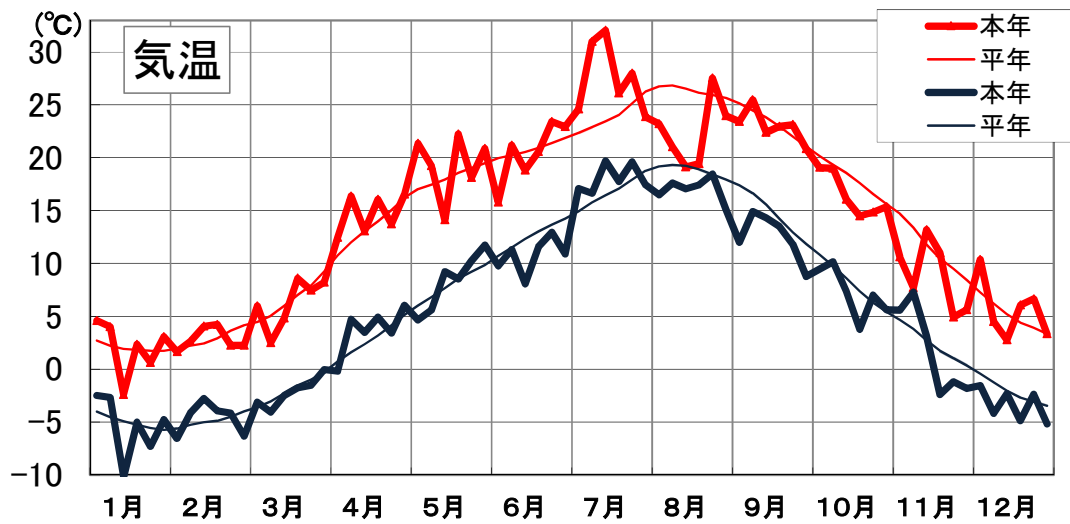
成熟期も平年より5日遅れ、10月18日となった。a当たり粗収量は22.3kg(平年比79)となった。収量構成要素は、稈実莢数20.3莢/本(平年比72)、一莢粒数1.7粒/莢(平年比116)、百粒重は39.3g(平年比108)となった。

表4 大豆の生育調査及び収量調査

年次	開花期	成熟期	わい化病 株率	主茎長	主茎 節数	分枝 数	最下位着 莢節位高	稈実 莢数	一莢 粒数	全重	粗子 実重	粗百 粒重
	月日	月日	%	cm	節	本/本	cm	莢/本	粒/莢	kg/a	kg/a	g
本年	7月21日	10月18日	1.5	64	14.9	2.1	18.6	20.3	1.7	59.7	22.3	39.3
平年	7月27日	10月13日	16.8	70	15.8	2.7	15.6	28.1	1.4	58.0	28.2	36.5
平年差・比	-6日	+5日	-15.3	92	94	78	119	72	116	103	79	108

注) 平年:平成19～28年の10か年の平均値

平成29年気象グラフ



平成 29 年気象表

平年：1986 年（S61）～ 2015 年（H27）

月	項 目	最高気温 (℃)		最低気温 (℃)		平均気温 (℃)		降水量 (mm)		日照時間 (時間)	
	半 旬	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
1 月	第 1 半旬	4.6	2.7	-2.5	-4.0	0.6	-0.6	3.0	7.4	18.2	21.3
	第 2 半旬	4.0	2.2	-2.7	-4.5	0.9	-1.0	0.0	7.3	14.1	21.6
	第 3 半旬	-2.4	1.9	-10.2	-4.9	-5.6	-1.4	0.0	7.1	23.8	22.2
	第 4 半旬	2.4	1.8	-5.0	-5.3	-1.0	-1.5	18.0	6.7	24.0	23.3
	第 5 半旬	0.6	1.8	-7.3	-5.5	-2.7	-1.7	1.5	6.7	18.5	25.0
	第 6 半旬	3.1	1.7	-4.8	-5.7	-0.5	-1.8	13.0	8.1	29.5	32.5
	月平均・合計	2.0	2.0	-5.4	-5.0	-1.4	-1.3	35.5	43.2	128.1	145.9
2 月	第 1 半旬	1.6	2.0	-6.5	-5.6	-2.0	-1.7	6.0	6.5	12.5	28.3
	第 2 半旬	2.6	2.2	-4.1	-5.3	-0.4	-1.4	35.0	6.8	15.8	28.7
	第 3 半旬	4.1	2.5	-2.8	-5.0	0.5	-1.1	1.0	7.6	24.1	29.5
	第 4 半旬	4.2	2.9	-3.9	-4.9	0.6	-0.8	7.5	8.0	20.4	31.1
	第 5 半旬	2.3	3.7	-4.2	-4.5	-0.7	-0.3	4.5	7.8	23.8	32.1
	第 6 半旬	2.3	4.2	-6.3	-4.0	-2.0	0.2	0.0	6.3	23.8	25.7
	月平均・合計	2.8	2.9	-4.6	-4.9	-0.7	-0.8	54.0	43.1	120.3	175.4
3 月	第 1 半旬	6.0	4.5	-3.1	-3.6	1.6	0.5	0.0	8.5	35.9	32.1
	第 2 半旬	2.5	5.1	-4.1	-3.0	-0.6	1.0	16.0	9.4	26.0	32.6
	第 3 半旬	4.8	6.0	-2.5	-2.3	1.2	1.8	11.0	9.5	21.7	33.0
	第 4 半旬	8.6	7.0	-1.8	-1.5	3.3	2.7	0.0	9.4	43.6	32.9
	第 5 半旬	7.5	7.9	-1.5	-1.0	2.8	3.4	1.5	9.4	23.9	33.4
	第 6 半旬	8.2	9.2	0.0	-0.3	3.9	4.4	12.0	11.0	25.7	41.3
	月平均・合計	6.3	6.6	-2.2	-1.9	2.0	2.3	40.5	57.2	176.8	205.4
4 月	第 1 半旬	12.5	10.8	-0.2	0.7	6.0	5.7	0.0	8.3	38.1	35.1
	第 2 半旬	16.4	12.0	4.7	1.6	10.5	6.7	0.0	7.5	34.7	35.1
	第 3 半旬	13.1	13.0	3.5	2.4	8.6	7.6	29.5	7.9	27.7	34.6
	第 4 半旬	16.1	14.0	4.9	3.2	10.0	8.5	17.5	9.2	29.4	34.1
	第 5 半旬	13.7	15.0	3.4	4.1	8.2	9.5	3.0	10.8	33.3	34.2
	第 6 半旬	16.6	16.2	6.1	5.1	11.0	10.6	11.0	11.4	29.7	34.9
	月平均・合計	14.7	13.5	3.7	2.9	9.0	8.1	61.0	55.1	193.0	208.0
5 月	第 1 半旬	21.4	17.0	4.7	6.0	13.2	11.4	0.0	11.3	53.3	34.5
	第 2 半旬	19.3	17.5	5.6	6.8	13.3	12.0	5.5	11.3	31.6	33.4
	第 3 半旬	14.1	17.9	9.2	7.7	11.1	12.6	28.5	10.6	7.6	33.0
	第 4 半旬	22.3	18.6	8.5	8.6	15.2	13.4	1.5	10.5	50.0	32.8
	第 5 半旬	18.1	19.0	10.3	9.2	13.7	13.9	3.0	11.5	25.2	32.8
	第 6 半旬	20.9	19.5	11.8	9.9	16.0	14.4	18.0	13.1	25.3	39.5
	月平均・合計	19.3	18.3	8.3	8.0	13.7	13.0	56.5	68.2	193.0	206.1
6 月	第 1 半旬	15.8	20.0	9.8	10.7	12.4	15.1	40.0	10.5	3.1	31.8
	第 2 半旬	21.2	20.2	11.3	11.5	16.4	15.5	15.5	11.9	30.9	29.3
	第 3 半旬	18.8	20.5	8.1	12.3	13.8	16.1	0.0	14.1	35.4	26.8
	第 4 半旬	20.6	20.9	11.6	13.1	16.0	16.6	4.5	16.4	31.3	25.5
	第 5 半旬	23.4	21.4	13.0	13.7	17.7	17.2	13.0	17.1	23.1	25.6
	第 6 半旬	22.9	21.9	10.9	14.2	17.3	17.8	0.0	18.4	52.1	25.3
	月平均・合計	20.5	20.8	10.8	12.6	15.6	16.4	73.0	88.4	175.8	164.3

平成 29 年気象表

平年：1986年（S61）～ 2015年（H27）

月	項 目	最高気温 (℃)		最低気温 (℃)		平均気温 (℃)		降水量 (mm)		日照時間 (時間)	
	半 旬	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
7月	第 1 半旬	24.6	22.4	17.1	15.0	20.8	18.3	41.5	21.6	15.5	24.1
	第 2 半旬	31.0	22.9	16.6	15.8	23.1	19.0	4.5	23.9	53.5	23.2
	第 3 半旬	32.1	23.5	19.7	16.5	25.9	19.6	0.0	22.4	45.5	22.8
	第 4 半旬	26.1	24.1	17.8	17.1	21.5	20.2	18.5	18.5	17.1	23.5
	第 5 半旬	28.0	25.1	19.6	17.9	23.5	21.1	96.0	16.6	22.4	25.4
	第 6 半旬	23.9	26.3	17.4	18.8	20.0	22.1	2.0	21.6	18.8	32.5
	月平均・合計	27.6	24.0	18.0	16.8	22.5	20.0	162.5	124.4	172.7	151.6
8月	第 1 半旬	23.2	26.8	16.5	19.2	19.3	22.5	0.0	21.6	24.5	28.0
	第 2 半旬	21.0	26.8	17.6	19.3	18.8	22.6	31.5	24.1	4.1	27.9
	第 3 半旬	19.1	26.6	17.1	19.3	17.9	22.5	38.0	23.4	0.0	26.5
	第 4 半旬	19.4	26.2	17.4	18.9	18.1	22.1	33.0	21.5	0.1	25.9
	第 5 半旬	27.5	25.9	18.5	18.4	22.9	21.8	56.5	21.1	27.7	26.7
	第 6 半旬	24.0	25.7	15.1	17.9	19.7	21.5	0.5	28.0	22.3	31.9
	月平均・合計	22.4	26.3	17.0	18.8	19.5	22.2	159.5	139.8	78.6	166.9
9月	第 1 半旬	23.4	25.2	12.0	17.4	17.6	21.0	0.0	26.6	39.7	25.5
	第 2 半旬	25.5	24.5	14.9	16.6	19.8	20.3	10.0	31.1	26.8	25.2
	第 3 半旬	22.4	23.8	14.3	15.6	18.2	19.4	20.5	37.4	23.2	26.0
	第 4 半旬	22.9	23.0	13.5	14.3	18.3	18.4	24.5	37.1	22.2	26.8
	第 5 半旬	23.1	22.0	11.8	12.9	17.2	17.3	7.0	28.0	39.2	27.3
	第 6 半旬	20.8	21.1	8.8	11.8	14.5	16.3	25.0	21.6	24.0	27.3
	月平均・合計	23.0	23.2	12.6	14.8	17.6	18.8	87.0	181.8	175.0	158.2
10月	第 1 半旬	19.1	20.2	9.5	10.8	14.1	15.4	16.5	21.1	21.3	26.8
	第 2 半旬	19.0	19.3	10.2	9.8	14.7	14.4	11.0	20.0	12.9	27.3
	第 3 半旬	16.1	18.6	7.4	8.6	11.4	13.5	53.0	16.4	26.6	28.4
	第 4 半旬	14.5	17.6	3.8	7.4	9.1	12.4	1.5	13.3	21.5	28.4
	第 5 半旬	14.9	16.5	7.0	6.3	11.1	11.3	138.0	13.6	18.2	27.1
	第 6 半旬	15.4	15.6	5.6	5.4	10.3	10.5	20.0	18.1	28.1	31.5
	月平均・合計	16.5	18.0	7.2	8.0	11.8	12.9	240.0	102.4	128.6	169.5
11月	第 1 半旬	14.9	14.7	5.6	4.6	10.3	9.6	0.5	14.0	20.3	25.4
	第 2 半旬	16.3	13.4	7.3	3.8	12.0	8.6	1.5	12.5	23.9	23.3
	第 3 半旬	11.9	11.8	3.1	2.7	7.6	7.2	2.5	11.1	16.8	21.3
	第 4 半旬	5.9	10.5	-2.4	1.7	1.8	6.0	1.5	9.2	20.6	20.3
	第 5 半旬	5.3	9.5	-1.2	1.1	2.1	5.1	0.5	8.7	16.7	19.7
	第 6 半旬	7.0	8.4	-1.8	0.4	2.5	4.2	11.0	9.5	21.2	19.2
	月平均・合計	10.2	11.4	1.8	2.4	6.1	6.8	17.5	65.1	119.5	129.1
12月	第 1 半旬	4.9	7.2	-1.6	-0.4	1.3	3.3	3.0	9.9	21.5	18.9
	第 2 半旬	2.9	6.2	-4.2	-1.2	-0.3	2.4	1.5	9.3	18.1	18.8
	第 3 半旬	3.9	5.2	-2.3	-2.0	0.7	1.5	0.0	8.1	19.7	18.9
	第 4 半旬	1.9	4.4	-4.9	-2.7	-1.1	0.8	1.0	7.3	19.5	19.3
	第 5 半旬	7.4	3.9	-2.4	-3.1	2.8	0.4	0.0	7.7	19.3	19.8
	第 6 半旬	0.9	3.4	-5.2	-3.5	-2.0	0.0	0.0	9.4	21.8	24.7
	月平均・合計	3.6	5.1	-3.4	-2.2	0.2	1.4	5.5	51.7	119.9	120.5

II 試験研究成果・普及情報の公表及び研修・技術協力

1 試験研究成果・普及情報

(1) 普及技術情報

区 分	事 項 名
指導参考資料	珠芽を利用したにんにくの種苗生産技術
	にんにくにおける連続乾燥とテンパリング乾燥の最適な組合せ
	いちご「なつあかり」の春定植作型における「ランナー子株の冷蔵後挿し苗」技術
	夏だいこんのキスジノミハムシに対する効果的な防除体系
	青森県におけるゴボウ黒条病（くろすじびょう）の発生確認
農薬関係資料	だいこんの白さび病およびワッカ症に対するピカルブトラゾクス水和剤（ピシロックフロアブル）の使い方
	やまのいもの葉渋病に対する銅水和剤（フジドーLフロアブル）の使い方
	にんにくの葉枯病に対するアゾキシストロビン・TPN水和剤（アミスターオブティフロアブル）の使い方
	食用ぎくの灰色かび病に対するフルジオキシニル水和剤（セイビアーフロアブル20）の使い方
	やまのいもの青かび病に対するイミノクタジニアルベシル酸塩水和剤（ベルコート水和剤）の使い方
	ねぎのさび病に対するピコキシストロビン水和剤（メジャーフロアブル）の使い方
	にんにくのネギコガに対するペルメトリン乳剤（アディオン乳剤）の使い方
	だいこんのネグサレセンチュウに対するフルオピラム粒剤（ビーラム粒剤、ネマクリーン粒剤）の使い方

(2) 刊行物

- ア 平成28年度 試験成績概要集 (平成29年 5 月、60部発行)
- イ 野菜研ニュースNo.1 8 (平成29年 6 月、ホームページ)
- ウ 野菜研ニュースNo.1 9 (平成29年 8 月、ホームページ)
- エ 野菜研ニュースNo.2 0 (平成29年10月、ホームページ)
- オ 野菜研ニュースNo.2 1 (平成30年 3 月、ホームページ)

(3) 学会研究会等報告

著者、発表者	題名	雑誌名等 (号、ページ)	発表月	投稿先	論文/講演 要旨
町田創	長日処理及び肥効調節 型肥料の施肥方法が四 季成り性イチゴ品種 ‘なつあかり’の収量 に及ぼす影響	園芸学会東北支 部平成29年度大 会 研究発表要 旨, p19-20	H29. 8	園芸学会東 北支部	講演要旨
町田創	温室ハイブリッド暖房 における非石油暖房機 の供給熱量割合の推定	生物と気象, 第 17巻, 第4 号, p97-101	H29. 12	日本農業気 象学会	論文
町田創	寒冷地の夏秋トマト栽 培における生育抑制温 度の特定	日本農業気象学 会2018年全国大 会講演要旨 集, p203	H30. 3	日本農業気 象学会	講演要旨
新藤潤一	夏ダイコンのキスジノ ミハムシに対する効果 的な防除体系	第71回北日本病 害虫研究会	H30. 2	北日本病害 虫研究会	ポスター 発表
加賀友紀子	青森県におけるゴボウ 黒条病の発生	第71回北日本病 害虫研究会	H30. 2	北日本病害 虫研究会	ポスター 発表

(4) 野菜研究所試験研究成果発表会

日時 平成30年2月23日(金)

場所 三沢市国際交流教育センター(三沢市大字三沢字園沢230-1)

参集範囲

(独)種苗管理センター、農家、農業関係団体、各市町村、県(農林水産部各課、各地域県民局地域農林水産部、病虫害防除所、営農大学校)、産技センター(関係農林部門研究所)

発表内容

- ・ 珠芽を利用したニンニクの種苗生産技術
栽培部 主任研究員 今 智穂美
- ・ 夏だいこんのキスジノミハムシに対する効果的な防除法
病虫部 研究管理員 新藤 潤一
- ・ 青森県におけるゴボウ黒条病の発生確認
病虫部 研究員 加賀 友紀子
- ・ イチゴ品種育成の状況
品種開発部 研究管理員 東 秀典
- ・ ナガイモ品種育成の状況
品種開発部 研究管理員 前嶋 敦夫
- ・ 近接リモートセンシングによるナガイモ茎葉生育の非破壊計測
栽培部 部長 鎌田 直人
- ・ ナガイモ小種子の利用方法
栽培部 研究員 齋藤 生
- ・ ニンニクのイモグサレセンチュウ試験の取組み
病虫部 研究員 青山 理絵

(5) 野菜研究所(農産物加工研究所、農林総合研究所藤坂稲作部)公開デー

日時 平成29年9月8日(金)

場所 野菜研究所(六戸町大字犬落瀬字柳沢91)

来場者 800人

内容

- ・ ミニ講座、所内見学
- ・ 野菜販売、加工品など物産販売
- ・ お米、加工品の試食
- ・ 農業機械、ハウス資材展示
- ・ 併催行事 にんにく共進会、最新農機実演会

(6) 一般雑誌・普及誌・ラジオ

ア 雑誌「土づくりとエコ農業」

題 名	巻号	頁	所属	氏名
ナガイモの形状と肥培管理	50-542	12-13	栽培部	鎌田直人
青森県におけるニンニクほ場の実態と 土壌診断に基づいた適正施肥技術	50-542	14-16	栽培部	今智穂美

イ ラジオ

月. 日	発信先	発信内容	所属	氏名
5. 13	RAB「農事放送」	ながいもの高品質・多収生産 技術について	栽培部	鎌田直人
6. 10	RAB「農事放送」	にんにくの高品質乾燥技術に ついて	栽培部	今智穂美
8. 19	RAB「農事放送」	夏秋いちごの高品質生産のポ イントについて	栽培部	町田創
11. 25	RAB「農事放送」	ねぎの春まき栽培の育苗管理 について	栽培部	今智穂美
1. 13	RAB「農事放送」	春植たまねぎの管理について	栽培部	細田洋一

ウ 新聞

月. 日	発信先	発信内容	所属	氏名
5. 24	農業共済新聞	押さえておきたい生産技術② 「ながいも高支柱栽培の増収 効果」	栽培部	鎌田直人
6. 21	農業共済新聞	押さえておきたい生産技術③ 「「にんにくの乾燥チェック リスト」の活用法」	栽培部	今智穂美
10. 18	農業共済新聞	ニンニクのチューリップサビ ダニ被害を広げないために	病虫部	新藤潤一

エ ホームページ

月. 日	発信先	発信内容	所属	氏名
10月12日	全国農業改良 普及支援協会	「みんなの農業広場」ニンニ ク周年供給のための収穫後処 理技術	栽培部	今智穂美

(7) 表彰

受賞者	月日	受賞名	概要（又は理由）
主査 河村里子	9. 14	3 研究所及び青森県営 農大・学校連携による低 濃度PCB廃棄物処分経費 の大幅削減	関係公所間で情報交換を重ね、用意 周到に準備を進めた結果、大きな経 費削減を達成した

2 研修・技術協力

(1) 農業ドクター派遣

担当部所	担当者	内容	日付	依頼者
栽培部	町田創	夏秋いちご「なつあかり」の特性調査。	H29.4～11	津軽苺出荷組合
栽培部	町田創	夏秋いちご「なつあかり」の開花安定株選抜。	H29.4～11	三菱製紙株式会社八戸工場

(2) 講師派遣

担当部所	担当者	内容	日付	依頼者
栽培部	今智穂美	にんにく高品質安定生産技術研修会	6月	青森県農産園芸課
	今智穂美	にんにく乾燥技術講習会	6月	JAつがるにしきたにんにく部会
	鎌田直人	ながいも栽培技術研修会	7月	青森県農産園芸課
	今智穂美	にんにく高品質安定生産技術研修会	7月	青森県農産園芸課
	今智穂美	土づくり指導力向上研修	7月	青森県食の安全・安心推進課
	鎌田直人 齋藤生 町田創	ながいも栽培技術研修会	8月	青森県農産園芸課
	鎌田直人	ながいもプロフェッショナル養成研修	8月	青森県農産園芸課
	町田創	ハイブリッド暖房について	11月	農業電化協会
	今智穂美	加工業務用にんにく検討会	12月	青森県農産園芸課
	鎌田直人	ながいも産地力強化戦略推進大会	1月	青森県農産園芸課
	今智穂美	労働力不足に対応した機械化農業推進事業成果報告会	2月	青森県農林水産政策課
	鎌田直人 齋藤生	ながいもプロフェッショナル養成研修	2月	青森県農産園芸課
	今智穂美	青森にんにく革新技術実用化研究報告会	3月	青森県農産園芸課
	鎌田直人 町田創	地域資源利活用研究シンポジウム	3月	弘前大学
品種開発部	細田洋一	たまねぎ栽培振興研修会	7月	青森県農村整備課
	細田洋一 前嶋敦夫	ながいも栽培技術研修会	8月	青森県農産園芸課
	細田洋一	ながいもプロフェッショナル養成研修	8月	青森県農産園芸課
	細田洋一	にんにく栽培講習会	8月	中南県民局
	細田洋一	東北農業試験研究推進会議野菜花き推進部会	8月	東北農業研究センター
	細田洋一	ながいもプロフェッショナル養成研修	2月	青森県農産園芸課

(2) 講師派遣 (続き)

担当部所	担当者	内容	日付	依頼者
病虫部	新藤潤一 青山理絵	にんにく高品質安定生産技術研修会	6月	青森県農産園芸課
	新藤潤一	ながいも栽培技術研修会	7月	青森県農産園芸課
	新藤潤一 加賀友紀子 青山理絵	病害虫及び防除に関する講義・実習	7月	営農大学校
	新藤潤一	ながいも栽培技術研修会	8月	青森県農産園芸課
	新藤潤一	東北農業試験研究会議生産環境推進部会病害虫研究会	8月	東北農業研究センター
	新藤潤一 青山理絵	病害虫及び防除に関する講義・実習	9月	営農大学校
	加賀友紀子	病害虫及び防除に関する講義	11月	営農大学校
	新藤潤一	病害虫及び防除に関する講義	11月	営農大学校
	新藤潤一	たまねぎ病害虫講習会	12月	青森県農村整備課
	新藤潤一	ながいも産地力強化戦略推進大会	1月	青森県農産園芸課
	青山理絵	青森市園芸講習会	1月	青森市
	新藤潤一	たまねぎ栽培研修会	2月	東北町
	新藤潤一	全国農業システム化研究会 事例発表	2月	全国農業システム化研究会
	加賀友紀子	ごぼう病害講習会	3月	JA十和田おいらせ
	新藤潤一	病害虫防除土づくり研修会	3月	秋田県植物防疫協会

(3) 審査員派遣

担当部所	担当者	内容	日付	依頼者
所長	西澤登志樹	ながいもの達人選定会議	H29. 8. 2	全農あおもり
	西澤登志樹	にんにく共進会審査会	H29. 9. 7	全農あおもり
	西澤登志樹	たっこにんにく共進会審査会	H29. 9. 21	田子町
	西澤登志樹	ながいも共進会審査会	H30. 1. 16	全農あおもり
栽培部	今智穂美	にんにく共進会審査会	H29. 9. 7	全農あおもり
	鎌田直人	損害評価組織会	H29. 6. 21	青森県農業共済連合会
	鎌田直人	プロジェクト研究発表会審査	H30. 1. 11	営農大学校
	鎌田直人	園芸施設共済部会	H30. 3. 22	青森県農業共済連合会
	鎌田直人 齋藤生	ながいも共進会審査会	H30. 1. 16	全農あおもり
品種開発部	細田洋一 鹿内靖浩	にんにく優良種苗検査	H29. 5. 9	全農あおもり
	鹿内靖浩	にんにく優良種苗検査	H29. 5. 10	全農あおもり
	細田洋一	全日本野菜品種審査会	H29. 7. 3～ 4	日本種苗協会
	細田洋一	放射性物質環境移行低減化調査 検討委員会	H29. 7. 28	環境化学研究所
	前嶋敦夫	ながいも原種検査会	H29. 7. 31	全農あおもり
	細田洋一 前嶋敦夫	ながいも原種検査会	H29. 8. 17	全農あおもり
	細田洋一	全日本野菜品種審査会	H29. 8. 24	日本種苗協会
	細田洋一	ながいも原種検査会	H29. 9. 11	全農あおもり
	細田洋一	畑作物共済部会（ホップ）	H29. 11. 27	青森県農業共済連合会
	細田洋一	畑作物共済部会（大豆）	H30. 2. 16	青森県農業共済連合会
	細田洋一	放射性物質環境移行低減化調査 検討委員会	H30. 3. 2	環境化学研究所
	細田洋一	にんにく優良種苗検査	H30. 3. 2	全農あおもり
病虫部	今満 青山理絵	にんにく優良種苗検査	H29. 5. 9	全農あおもり
	今満	にんにく優良種苗検査	H29. 5. 10	全農あおもり
	加賀友紀子	ながいも原種検査会	H29. 9. 11	全農あおもり

(4) 会議・研究会

日付	場所	主催者	担当者	内容
4. 17	野辺地町	上北県民局	町田創	野辺地葉つきこかぶ産地向上推進会議
4. 17～18	富山市	農研機構	細田洋一、東秀典	業務・加工用タマネギ現地検討会
4. 25～28	盛岡市	植物病理学会	加賀友紀子	植物病理学会
5. 8	仙台市	農水省	細田洋一	種子法廃止に伴う説明会
5. 15～16	盛岡市 陸前高田市	岩手大学	町田創	経営体強化プロジェクト（ICT養液土耕）研究推進会議
5. 16	青森市	施肥合理化協会	鎌田直人	施肥合理化協会幹事会
5. 19	六戸町	野菜研	西澤登志樹、今満、今智穂美、對馬由記子、新藤潤一、加賀友紀子、青山理絵	第1回イモグサレセンチュウ研究連絡会議
5. 22	六戸町	六戸町	西澤登志樹	六戸町農業振興対策協議会
5. 24	青森市	植物防疫協会	今満	県植物防疫協会幹事会
5. 26	六戸町	県農産園芸課	西澤登志樹、今満、鎌田直人、細田洋一、新藤潤一、齋藤生	ながいも戦略作業部会
5. 29	青森市	県食の安全・安心推進課	加賀友紀子	青森県農薬適正使用推進会議
5. 29	十和田市	上北地域県民局	西澤登志樹	上北の元気結集協議会
5. 29	青森市	県食の安全・安心推進課	新藤潤一	病虫害発生予察会議
6. 2	六戸町	県農産園芸課	西澤登志樹、今智穂美、鎌田直人、今満、新藤潤一、加賀友紀子、青山理絵	にんにく高品質安定生産技術研修会
6. 29	青森市	経営研究協会	西澤登志樹	経営研究協会成果発表会
6. 29	青森市	県農産園芸課	西澤登志樹	ながいも戦略推進会議
7. 4	東通村	県農産園芸課	町田創	夏秋イチゴ生産技術現地検討会
7. 5	六戸町	県農産園芸課	今智穂美、鎌田直人、齋藤生、町田創、細田洋一、今満、新藤潤一、加賀友紀子、青山理絵	ながいも栽培技術研修会
7. 5～6	弘前市 青森市	東北地域農業関係場所長会	西澤登志樹	東北地域農業関係場所長会議
7. 12～13	盛岡市	東北土壌肥料学会	今智穂美	東北土壌研究会
7. 12～13	岐阜市	農研機構	加賀友紀子	SIP還元消毒ユニット中間成績検討会
7. 18	青森市	県植物防疫協会	新藤潤一	無人ヘリコプター安全対策推進部会
7. 19	東京都	JST	町田創	新ワークショップ進化する植物計測技術
7. 26～27	十和田市 五戸町	東北農業研究センター	西澤登志樹、鎌田直人、細田洋一、前嶋敦夫、東秀典、鹿内靖浩、齋藤生、町田創	東北農業試験研究推進会議野菜夏期研究会
7. 27	盛岡市	東北農業研究センター	今満	東北農業試験研究推進会議農業経営研究会
7. 28	青森市	県農林水産政策課	今満、新藤潤一、鹿内靖浩、町田創	野菜普及指導員専門技術強化研修
7. 28	十和田市	上北地域県民局	齋藤生	上北地域バイオエネルギーデザイン研修会
8. 3	六戸町	県農産園芸課	西澤登志樹、鎌田直人、新藤潤一、町田創、今智穂美、齋藤生	ながいも栽培技術研修会
8. 9	秋田市	東北農業研究センター	齋藤生	東北農業試験研究発表会
8. 16	青森市	県農産園芸課	細田洋一	優良種苗会議
8. 16～17	鶴岡市	園芸学会東北支部	今満	東北支部評議員会、シンポジウム
8. 17～18	鶴岡市	園芸学会東北支部	町田創	東北支部大会

日付	場所	主催者	担当者	内容
8. 24～25	八戸市 五戸町 十和田市	東北農業研究センター	西澤登志樹、東秀典、鹿内靖浩、 今満、新藤潤一、加賀友紀子、青 山理絵	東北農業試験研究推進会議病害 虫研究会
8. 21～22	盛岡市	東北農業研究センター	今智穂美	東北農業試験研究推進会議作業 技術研究会
8. 28	青森市	県食の安全・安心推 進課	今満、鎌田直人	青森県農薬適正使用推進会議
8. 29	十和田市	県国際交流課	西澤登志樹、前嶋敦夫	ながいもパイヤー交流会
8. 31	東北町、六 戸町、十和	県農産園芸課	西澤登志樹、細田洋一、 前嶋敦夫	園試系23号現地研修会
8. 31～9. 1	東京都	農研機構	加賀友紀子	SIP事業中間成績検討会
9. 4	青森市	東北農政局	前嶋敦夫	東北ソバ研究会
9. 6	八戸市	青森県黒にんにく協 会	鹿内靖浩、今智穂美	黒にんにくサミット
9. 7	六戸町	J A全農あおもり	西澤登志樹、鎌田直人、 今智穂美	にんにく共進会審査
9. 28～29	弘前市	日本植物病理学会東 北支部	加賀友紀子	東北支部会
10. 6	青森市	県農林水産政策課	前嶋敦夫	畑作物生産指導要領編成会議
10. 10	六戸町	農産物加工研究所	西澤登志樹、今満、今智穂美、對 馬由記子、新藤潤一、加賀友紀 子、青山理絵	第2回イモグサレセンチュウ研 究連絡会議
10. 11	六戸町	県農産園芸課	西澤登志樹、今満、鎌田直 人、前嶋敦夫、新藤潤一、齋 藤生	ながいも戦略作業部会
10. 10～11	六戸町	野菜研究所	西澤登志樹、鎌田直人、 今智穂美、町田創	経営体強化プロジェクト（ICT 養液土耕）中間検討会
10. 19	青森市	県農産園芸課	齋藤生	冬の農業新規作付講座
10. 20	青森市	県食の安全・安心推 進課	新藤潤一	防除指針編成会議
10. 26	青森市	県病害虫防除所	今満、新藤潤一、加賀友 紀子	北海道東北地区植物防疫協議会 資料作成会議
11. 1～2	盛岡市	日本植物防疫協会	新藤潤一、加賀友紀子、 青山理絵	新農薬実用化試験成績検討会
11. 7	青森市	県農林水産政策課	今智穂美	健康な土づくり技術マニュアル 作成検討会
11. 13	青森市	県農林水産政策課	西澤登志樹	「攻めの農林水産業」推進大会
11. 16	青森市	県農産園芸課	今智穂美	冬の農業新規作付講座
11. 27	青森市	県植物防疫協会	新藤潤一、加賀友紀子	農薬展示圃成績検討会
11. 27	青森市	県施肥合理化協会	今智穂美	肥料展示圃成績検討会
12. 5	青森市	県植物防疫協会	新藤潤一、加賀友紀子、 町田創	防除指針作成会議野菜部会
12. 7～8	京都市	農業食料工学会	今智穂美	農業食料工学会シンポジウム
12. 8	六戸町	県農産園芸課	西澤登志樹、今満、鎌田直 人、細田洋一、前嶋敦夫、齋 藤生、町田創	ながいも長大系統及び高支柱栽 培検討会
12. 13	青森市	県食の安全安心推進 課	新藤潤一	防除指針編成会議
12. 14	東京都	日本植物防疫協会	新藤潤一、加賀友紀子	新農薬実用化試験（生物農薬） 成績検討会
12. 21	酒田市	山形県農業総合研究 センター	町田創	経営体強化プロジェクト（ICT 養液土耕）冬作業菜類栽培検討
1. 10	十和田市	県農産園芸課	町田創	冬の農業推進現地研修会
1. 16	十和田市	J A全農あおもり	西澤登志樹、鎌田直人、 齋藤生	ながいも共進会
1. 17	十和田市	J A全農あおもり	西澤登志樹、鎌田直人、齋藤 生、今満、細田洋一、前嶋敦 夫、新藤潤一	ながいもフォーラム

日付	場所	主催者	担当者	内容
1. 23	十和田市	県農産園芸課	町田創	夏秋いちご「すずあかね」栽培技術研修会
1. 23～24	津市	農研機構	細田洋一、東秀典	委託プロ加工野菜成績設計検討会
1. 24	青森市	県農産園芸課	鎌田直人、前嶋敦夫	「攻めの農林水産業」推進本部農産園芸部会
1. 25～26	盛岡市	東北農業研究センター	今満、青山理絵	東北農業試験研究推進会議生産環境部会病害虫研究会
1. 25～26	盛岡市	東北農業研究センター	今智穂美	東北農業試験研究推進会議生産環境部会土壌研究会
1. 26	盛岡市	東北農業研究センター	町田創	東北農業試験研究推進会議生産環境部会農業気象研究会
1. 26	盛岡市	東北農業研究センター	今満	東北農業試験研究推進会議生産環境推進部会
1. 30～31	盛岡市	東北農業研究センター	町田創	東北農業試験研究推進会議経営研究会
1. 25～26	つくば市	農研機構	新藤潤一、加賀友紀子	SIP事業新規土壌還元消毒技術成績検討会、体系化検討会
2. 1～2	盛岡市	東北農業研究センター	鎌田直人、細田洋一、前嶋敦夫、今智穂美、齋藤	東北農業試験研究推進会議野菜花き部会
2. 6	青森市	県食の安全・安心推進課	加賀友紀子	青森県農薬適正使用推進会議
2. 7	六戸町	県農産園芸課	西澤登志樹、鎌田直人、今智穂美、齋藤生、細田洋一、前嶋敦夫、東秀典、鹿内靖浩、今満	ながいも新系統意見交換会
2. 8	青森市	県農林水産政策課	新藤潤一、齋藤生、町田創	普及指導員調査研究検討会
2. 9	青森市	県農林水産政策課、農林総合研究所	西澤登志樹、鎌田直人、今智穂美、齋藤生	労働力不足に対応した機械化農業事業成果発表会
2. 9	青森市	県農産園芸課	町田創	冬の農業現地実証展示ほ実績検討会
2. 15	青森市	県農産園芸課	東秀典、齋藤生	加工・業務用野菜実績検討会
2. 15～2. 16	八戸市	農研機構	今満、新藤潤一、加賀友紀子、青山理絵	北日本病害虫研究会
2. 19	東京都	全国農業システム化研究会	新藤潤一	システム化研究会事例発表
2. 20	十和田市	県農産園芸課	細田洋一、前嶋敦夫	ながいも優良種苗検討会
2. 22	六戸町	県農産園芸課	鎌田直人、今智穂美、細	ながいも戦略作業部会
2. 22	八戸市	三八県民局地域農林水産部	今智穂美	八戸平原地域営農推進協議会
2. 23	東京都	岩手大学	町田創	経営体強化プロジェクト（ICT養液土耕）成績検討会
2. 26	青森市	県植物防疫協会	新藤潤一	県植防運営委員会
2. 27～28	東京都	農研機構	加賀友紀子	SIP事業成績検討会、設計検討会
3. 8	十和田市	上北地域県民局地域農林水産部	西澤登志樹	「攻めの農林水産業」推進上北地方本部会議
3. 8～9	さいたま市	生研機構	齋藤生	生研機構報告会、作物別野菜分科会
3. 14～16	九州大学	日本農業気象学会	町田創	日本農業気象学会全国大会
3. 16	青森市	県植物防疫協会	新藤潤一、加賀友紀子、青山理絵	時節懇談会
3. 16	十和田市	上北地域県民局地域農林水産部	西澤登志樹	上北の元気結集協議会
3. 20	田子町	田子町	今満	たっこにんにく祝賀会
3. 20	青森市	県農産園芸課	細田洋一	ながいも戦略推進協議会
3. 20	東京都	農林水産技術会議	西澤登志樹	農林水産技術会議シンポジウム
3. 23	野辺地町	上北県民局	町田創	野辺地葉つきこかぶ産地向上推進会議

(5) 視察受け入れ

部所	案内件数	来所者数	視察、見学内容
所長、総務	1	2	ナガイモ、ニンニク栽培技術, 施設
栽培部	10	121	イチゴ、ナガイモ、ニンニク栽培技術
品種開発部	2	12	ナガイモ、ニンニク品種開発
病虫部	2	75	病害虫全般
計	15	210	

(6) 研修受け入れ

ア 新規任用普及指導員専門技術向上研修

受け入れ部所	研修部門	人数	期間
栽培部 品種開発部 病虫部	野菜	5名	29. 6. 26～7. 7 29. 11. 13～11. 24

イ インターンシップ

受け入れ部所	研修部門	所属・人数	期間
栽培部 品種開発部 病虫部	野菜	弘前南高 12名	29. 8. 23

1 国内研修

職・氏名	所属部所	研修内容	派遣先	派遣期間
研究員 町田創	栽培部	農業施設学会セミナー 測定制御を極める	農業施設学会	H29. 5. 10
研究員 齋藤生 町田創	栽培部	土壌管理指導者養成研修	一般財団法人日 本土壌協会 青森県	H29. 6. 29～ 6. 30
研究管理員 前嶋敦夫 主事 中川原廣守	栽培部	防火管理新規講習	—	H29. 7. 6
研究員 町田創	栽培部	鳥インフルエンザ防疫研 修会	青森県	H29. 7. 18
研究管理監 今満	病虫部	著作権セミナー	青森県	H29. 7. 21
研究員 青山理絵	病虫部	植物病害診断教育プログ ラム	佐賀大学農学部	H29. 9. 11～ 9. 15
研究管理員 前嶋敦夫	品種開発部	鳥インフルエンザ防疫机 上演習	青森県	H29. 10. 31
主任研究員 今智穂美	栽培部	土壌管理指導者養成研修	一般財団法人日 本土壌協会 青森県	H29. 11. 14～ 11. 15

2 県・産技センター研修

(1) 青森県・産技本部・人材育成委員会

職・氏名	研修内容	派遣先	派遣期間
所長 西澤登志樹 研究管理監 今 満	研究所長研修	青森産技	H29. 5. 25
主任研究員 今智穂美	自主研修 森林におけるリモートセンシング・ICT技術の活用研修	青森産技/林業研究所	H29. 7. 18
研究員 齋藤生	統計分析力向上研修	青森産技人材育成委員会	H30. 2. 27
栽培部長 鎌田直人 品種開発部長 細田洋一	研究部長クラス研修	青森産技人材育成委員会	H30. 2. 21
所長 西澤登志樹 主査 河村里子	メンタルヘルス及び安全衛生研修会	青森産技安全衛生推進委員会	H29. 7. 21
研究管理員 鹿内靖浩	ホームページ研修	青森産技情報システム委員会	H29. 8. 30
所長 西澤登志樹 研究管理員 鹿内靖浩	情報セキュリティ研修	青森産技情報システム委員会	H29. 9. 27
主任研究員 今智穂美	プレゼンテーション研修	青森産技人材育成委員会	H30. 2. 20
研究管理監 今満 栽培部長 鎌田直人	見える化シート作成研修	青森産技	H29. 11. 2

(2) 野菜研究所独自研修

項目	研修内容	講師	研修期間
野菜研セミナー	労働安全衛生講習会	所長 西澤登志樹	H29. 4. 3
野菜研セミナー	①ナガイモの形状に施肥体系が及ぼす影響 ②統計解析の解説と実際	①研究員 齋藤生 ②所長 西澤登志樹	H29. 7. 14
産技センター職員自主研修	植物光合成計測に関する研究会	岩手大学 准教授 鈴木雄二 (事務 町田創)	H29. 8. 7
野菜研セミナー	イチゴ花芽検鏡研修会	研究員 町田創	H29. 8. 9
野菜研セミナー	長日処理及び肥効調節型肥料の施肥方法が四季成り性イチゴ品種‘なつあかり’の収量に及ぼす影響	研究員 町田創	H29. 8. 15
野菜研セミナー	①情報セキュリティ研修 ②Jdream操作研修	①研究管理員 鹿内靖浩 ②研究管理員 新藤潤一	H29. 12. 22
野菜研セミナー	①珠芽を利用したニンニクの種苗生産技術 ②青森県におけるゴボウ黒条病の発生確認 ③イチゴ品種育成の状況 ④ナガイモ品種育成の状況 ⑤近接リモートセンシングによるナガイモ茎葉生育の非破壊計測 ⑥ナガイモ小種子の利用方法 ⑦イモグサレセンチュウ防除対策の取組み	①主任研究員 今智穂美 ②研究員 加賀友紀子 ③研究管理員 東秀典 ④研究管理員 前嶋敦夫 ⑤栽培部長 鎌田直人 ⑥研究員 齋藤生 ⑦研究員 青山理絵	H30. 2. 19 2. 20
野菜研セミナー	①プレゼンテーション研修 ②スライドの作り方	①主任研究員 今智穂美 ②研究員 齋藤生	H30. 3. 23
野菜研セミナー	統計解析の解説と実際	所長 西澤登志樹	H30. 3. 23

IV 種苗の生産と配付

1 作物の原原種の生産

種 類	品 種	面積 (a)	採種量 (kg)	備考 採種場所等
なたね	キザキノナタネ	0	0	
そば	階上早生	0	0	

2 作物の原種の採種

種 類	品 種	面積 (a)	採種量 (kg)	備考 採種場所等
なたね	キザキノナタネ	2	42	野菜研究所
そば	階上早生	130	30	野菜研究所

3 種苗等の配付

(1) 種苗の配付

種 類	品 種	数量 (kg)	配 付 先
そば	階上早生	500	青森県農産物改良協会
なたね	キザキノナタネ	15	青森県農産物改良協会
ながいも	園試系 6	300 むかご	全農あおもり
にんにく	福地ホホワイト (黒石A系統)	360 りん球 珠芽	全農あおもり

注．旧年産の種子も含む。

IV 資格取得

職・氏名	所属部所	資格内容
技能技師 沼畑至宏 技能技師 相坂和幸	栽培部	アーク溶接等業務

VI 総 務

1 位置・土地・建物

青森県上北郡六戸町大字犬落瀬字柳沢91

北緯 40° 38′

東経 141° 21′

標高 53m

土地	3,557 a
建物敷地	138 a
畑	2,066 a
道路・その他	1,353 a
建物	9,177㎡

2 所掌事務・分掌事務

(1) 所掌事務

- ア 野菜及び畑作物の試験研究に関すること。
- イ 野菜及び畑作物の種苗の育成及び配布に関すること。

(2) 栽培部の分掌事務

- ア 野菜研究所の庶務に関すること。
- イ 野菜の栽培改善の試験研究に関すること。
- ウ 野菜に係る農業機械及び農業施設の利用及び改善の試験研究に関すること。
- エ 野菜の施肥改善、作物栄養の試験研究に関すること。
- オ 野菜の鮮度保持及び貯蔵の試験研究に関すること。

(3) 品種開発部の分掌事務

- ア 野菜及び畑作物の品種改良の試験研究に関すること。
- イ 野菜の品種の適応性等の試験研究に関すること。
- ウ 野菜の種苗生産に関すること。
- エ そば、なたねの原原種の生産及び原種の増殖に関すること。

(4) 病虫部の分掌事務

- ア 野菜の病害虫防除の試験研究に関すること。

3 組織・職員

(1) 組織・職員数

人員：職員27名（プロパー職員13名、派遣職員6名、非常勤職員6名）

区 分	研究職員	事務職員	技能技師	非 常 勤 職 員	計
所 長	1				1
栽 培 部	4			2	6
研 究		※2	3	1	6
庶務・業務					
品種開発部	5				5
病 虫 部	4			3	7
計	14	※2	3	6	25

※農産物加工研究所と兼務

4 事務分担

(1) 所長

特 命 事 項	職 名	氏 名
1 所の管理、運営の総括に関する事	所 長	西澤 登志樹

(2) 全体

分 担 事 務	職 名	氏 名
1 研究項目の企画、立案および調整並びに青森県産業技術センター本部等との連絡調整に関する事	研究管理監	今 満
2 印章の管守に関する事		
3 所内見学者の調整に関する事		
4 研修生に関する事		
5 部の分掌に属さない事務の総轄に関する事		
6 その他所長の特命に関する事		

(2) 栽培部（試験研究）

部 長 鎌田 直人

分 担 事 務	主 担	副 担
1 栽培部に係る業務の総括に関する事	部長 鎌田 直人	副部長 (主任研究員) 今 智穂美
2 野菜の栽培・貯蔵に関する渉外、指導及び研修全般に関する事		
3 青森ナガイモの飛躍を目指した生育予測技術と長大系ナガイモ「園試系23号」を活用した輸出規格対応技術に関する事		
1 部に係る業務の総括補佐に関する事	副部長 (主任研究員) 今 智穂美	研究員 齋藤 生
2 青森ブランド野菜の高品質安定生産技術のうちニンニクに関する事		
3 青森にんにく革新技術確立事業のうち貯蔵品質に関する事		
4 労働力不足に対応した機械化農業推進事業に関する事		
5 野菜の機械及び機械化に関する事		
6 作物栄養、土壌管理に関する事		
1 青森ブランド野菜の高品質安定生産技術のうちナガイモに関する事	研究員 齋藤 生	部 長 鎌田 直人
2 あおもりながいも産地改革推進事業のうちナガイモの生産性向上へ向けた高品質多収技術に関する事		
3 野菜の貯蔵・鮮度保持に関する事		
4 加工・業務用野菜に関する事		
5 小麦・大豆作況試験に関する事		
1 青森ブランド野菜販売力強化のための新作型開発研究のうち夏秋イチゴに関する事	研究員 町田 創	部 長 鎌田 直人
2 新たな土壌管理による高品質農産物生産技術に関する事		
3 パイプハウスに導入できる低コスト省力化を実現する養液土耕・環境制御システムの開発に関する事		
4 野菜の生育調節剤・除草剤に関する事		

5 農業施設、資材の利用に関する事 6 気象観測・作況試験・生産情報の編集に関する事		
1 試験研究の補助に関する事	非常勤労務員 佐藤 渚 松村 沙織	

裁 培 部(事 務 関 係)

部 長 鎌 田 直 人

分 担 事 務	主 担	副 担
1 庶務に係る業務の総括に関する事 2 印章の管守に関する事 3 行事予定の管理に関する事 4 労働安全衛生に関する事 5 情報公開及び個人情報保護等に関する事 6 セクハラ相談に関する事	部 長 鎌 田 直 人	主 査 河 村 里 子 主 事 中 川 原 廣 守
1 予算執行管理に関する事 2 収入に関する事 3 支出契約決議に関する事 4 財産及び物品の管理に関する事 5 車両の配車等に関する事	主 事 中 川 原 廣 守	主 査 河 村 里 子 非常勤労務員 田 中 礼 子
1 職員の服務に関する事 2 職員の福利厚生に関する事 3 労働安全衛生に関する事 4 非常勤職員等に関する事 5 庶務関係の報告に関する事 6 庁舎内外の清掃・整備に関する事	主 査 河 村 里 子	主 事 中 川 原 廣 守 非常勤労務員 田 中 礼 子
1 文書の収受、発送及び保管に関する事 2 服務関係書類の整理に関する事 3 物品・図書の管理の補助に関する事 4 経理事務の補助に関する事 5 復命書及び旅行管理簿の整理に関する事	非常勤労務員 田 中 礼 子	主 査 河 村 里 子 主 事 中 川 原 廣 守
1 農場運営方針の推進に関する事 2 耕作作業の改善・合理化に関する事 3 農場員の作業指導に関する事 4 農場機械等の整備及び管理に関する事	技 能 技 師 山 本 勝 浩 沼 畑 至 宏 相 坂 和 幸	
1 車両の整備に関する事	主 事 中 川 原 廣 守	技 能 技 師 山 本 勝 浩 沼 畑 至 宏 相 坂 和 幸

分 担 事 務	主 担	副 担
1 品種開発部に係る業務の総括に関する事 2 品種開発・種苗生産の渉外、指導及び研修等に関する事 3 農場管理委員会に関する事	部 長 細 田 洋 一	副 部 長 (研究管理員) 前 嶋 敦 夫 研究管理員 東 秀 典
1 ニンニクの育成素材の養成に関する事 2 ニンニクの遺伝資源の収集・保存に関する事	部 長 細 田 洋 一	研究管理員 鹿 内 靖 浩 主任研究員 對馬由記子
1 ナガイモ優良品種の開発に関する事 2 特産野菜原原種維持増殖事業(ナガイモ)に関する事 3 青森ナガイモの飛躍を目指した生育予測技術の開発と園試系23号を活用した輸出規格対応生産技術の開発のうち園試系23号の試験に関する事 4 畑作物原原種・原種の生産・供給に関する事	副 部 長 (研究管理員) 前 嶋 敦 夫	研究管理員 東 秀 典 研究管理員 鹿 内 靖 浩
1 業務・加工用に適したタマネギ品種及び栽培技術の開発に関する事 2 あおもりながいも産地改革推進事業に関する事 3 イチゴ優良品種の開発に関する事 4 ナタネ育成系統特性評価に関する事	研究管理員 東 秀 典	部 長 細 田 洋 一 研究管理員 前 嶋 敦 夫
1 ニンニク優良品種開発に関する事 2 ニンニクの育成素材の養成に関する事 3 特産野菜原原種維持増殖事業(ニンニク)に関する事 4 たっこにんにくの種苗維持に関する事	研究管理員 鹿 内 靖 浩	部 長 細 田 洋 一 研究管理員 前 嶋 敦 夫
1 ナガイモの遺伝資源の収集・保存に関する事	主任研究員 對馬由記子	部 長 細 田 洋 一 研究管理員 東 秀 典
1 試験研究の補助に関する事	臨時労務手 大谷さおり	

病 虫 部

研究管理監（部 長） 今 満

分 担 事 務	主 担	副 担
1 病虫部に係る業務の総括に関すること 2 病害虫防除の渉外、指導及び研修等に関すること	部 長 (研究管理監) 今 満	副 部 長 (研究管理員) 新藤 潤一
1 ダイコンのキズジノミハムシなど特産野菜害虫の発生生態の 解明及び防除技術に関すること 2 トマト地下部病害虫体系防除に関すること 3 業務加工用適したタマネギ栽培開発事業の病害虫防除に関す ること 4 新農薬開発試験（殺虫剤）に関すること 5 虫害防除の指導及び研修等に関すること	副 部 長 (研究管理員) 新藤 潤一	部 長 今 満 研究員 加賀 友紀子 研究員 青山 理絵
1 トマト地下部病害虫体系防除に関すること 2 業務加工用に適したタマネギ栽培技術開発事業の病害虫防除 に関すること 3 生物くん蒸消毒による土壌病害虫防除技術に関すること 4 新農薬開発試験（殺菌剤）に関すること 5 病害防除の指導及び研修等に関すること	研究員 加賀 友紀子	部 長 今 満 研究管理員 新藤 潤一 研究員 青山 理絵
1 青森にんにく革新技術実用化事業のうちイモグサレセンチュ ウの診断技術と防除に関すること 2 生物くん蒸消毒による土壌病害虫防除技術に関すること 3 トマト地下部病害虫体系防除に関すること 4 特産野菜の土壌病害・線虫害の防除技術に関すること 5 新農薬開発試験（殺線虫剤）に関すること	研究員 青山 理絵	部 長 今 満 研究管理員 新藤 潤一 研究員 加賀 友紀子
1 試験研究の補助に関すること（品種開発部と兼務）	非常勤労務員 吉田 善枝 中村 美幸 重田 実花	

ニンニク病害虫特別対策プロジェクトチーム

分 担 事 務	主 担	副 担
1 プロジェクトチームの総括に関すること	所長 西澤登志樹	研究管理監 今 満 研究管理員 木村 勇司 (農林総研本務)
1 ニンニクイモグサレセンチュウ等虫害の防除技術に関すること	研究管理員 新藤 潤一 研究管理員 木村 勇司 (農林総研本務)	研究管理監 今 満 研究員 青山 理絵 研究管理員 石岡 将樹 (農林総研本務)
1 ニンニク病害の防除技術に関すること	研究管理員 岩間 俊太 (農林総研本務) 研究員 加賀友紀子	研究管理監 今 満 研究管理員 新藤 潤一 研究管理員 近藤 亨 (農林総研本務)
1 ニンニクの優良種苗の確保に関すること	主任研究員 對馬由記子	研究管理員 鹿内 靖浩 研究管理監 今 満

5 平成29年度予算

(1) 全体予算（決算額） (単位：千円)

目・細目	29年度 決算額	左 の 財 源	
		県交付金	その他
職員人件費	123,961	123,961	
研究業務費（開発、支援研究）	6,523	6,523	
研究費交付金事業費	12,929	12,929	
受託研究費	12,459		12,459
法人調整費	5,800	5,800	
管理運営費	39,758	39,758	
計	201,430	188,971	12,459

(2) 研究業務費（役員特別枠、開発研究、支援研究）

区分	整理番号	分類	研究課題名・事業名	期間		H29予算額(千円)		
				始	終	予算	収入	交付金
役員特別枠	役員枠	イ(イ)④	青森ナガイモの飛躍を目指した生育予測技術の開発と園試系23号を活用した輸出規格対応生産技術の開発	28	29	1,400	0	1,400
開発	野Ⅱ-1	イ(イ)①	青森ブランド野菜の高品質安定生産・貯蔵技術の研究開発	26	30	981	0	981
開発	野Ⅱ-2	ア(イ)③	特産野菜優良品種の育成	26	30	1,052	0	1,052
開発	野Ⅱ-3	ウ(イ)②	気象変動や生物多様性に適応した特産野菜の安全・安心な病害虫管理技術の研究開発	26	30	1,696	0	1,696
開発	農Ⅱ-5	ウ(ア)①	新たな土壌管理による高品質農産物生産技術の開発研究	27	30	200	0	200
小計						5,329		5,329
支援	農Ⅱ-101		農作物の生育状況等に関する調査	26	30	61	0	61
支援	農Ⅱ-102		本県に適する優良品種の選定	26	30	283	0	283
支援	農Ⅱ-103		農作物の種苗等生産	26	30	705	0	705
支援	農Ⅱ-104		遺伝資源の維持・収集	26	30	145	0	145
小計						1,194		1,194
計								6,523

(3) 競争的資金研究

No.	研究課題名	実施期間	金額 (千円)	委託元
1	SIP（戦略的イノベーション創造プログラム）「次世代農林水産業創造技術」「持続可能な農業生産のための新たな総合的植物保護技術の開発	H26～30	2,864	生物系特定産業技術研究支援センター
2	業務加工用に適したタマネギ品種及び栽培技術の開発事業費	H26～30	1,750	農林水産省
3	パイプハウスに導入できる低コスト省力化を実現する養液土耕・環境制御システムの開発	H29～31	2,300	生物系特定産業技術研究支援センター
計			6,914	

(4) 受託研究・補助事業（国・自治体）

No.	研究課題名	実施期間	金額 (千円)	委託元
1	「たっこオリジナル品種」技術開発	H29	500	田子町
2	青森にんにく革新技術実用化事業	H28～29	10,134	農産園芸課
3	労働力不足に対応した機械化農業推進事業	H29～30	560	農林水産政策課
4	農薬安全国内検疫推進事業	H28～29	126	食の安全安心推進課
5	農薬低減技術確立事業	H28～29	1,070	食の安全安心推進課
6	あおもりながいも産地改革推進事業	H29～30	2,627	農産園芸課
計			15,017	

(5) 受託研究（民間・団体等）

No.	研究課題名	実施期間	金額 (千円)	委託元
1	新農薬の実用化試験	H29	3,621	(社)青森県植物防疫協会
計			3,621	

(6) 青森県産業技術センター委員会

委員会	委員
労働安全委員会	鹿内靖浩
戦略委員会	新藤潤一
人材育成委員会	今 満
商品PR促進委員会	齋藤生
情報セキュリティ委員会	鹿内靖浩

野菜研究所圃場利用図（平成29年度）

平成29年4月1日作成

